

# アオザメ 大西洋

(Shortfin mako *Isurus oxyrinchus*)



## 管理・関係機関

- 国際連合食糧農業機関 (FAO)
- 大西洋まぐろ類保存国際委員会 (ICCAT)
- みなまぐろ保存委員会 (CCSBT)
- 絶滅のおそれのある野生動植物の種の国際取引に関する条約 (ワシントン条約：CITES)

## 最近の動き

2025年6月、南北大西洋両系群の資源評価が行われた。いずれの系群においても、ベイズ型プロダクションモデル (JABBA) 及び統合モデル(SS)が適用されたが、管理勧告にはSSの結果が適用されることとなった。両系群ともに、生産力や漁獲量が異なる複数のシナリオが検討されたが、生産力の低いシナリオは、モデル診断上の問題や非現実的な結果から棄却され、生産力が高いシナリオに基づく議論が行われた。北大西洋系群については、生産力に関わるパラメータ推定上の問題により、時間内に信頼性の高い資源状態を推定することができなかったため、全てのシナリオを対象として、2026年に資源評価をやり直すことになった。南大西洋系群については、従来よりも高い生産力の仮定の下、SSに基づく資源状態は、 $SSF_{2023}/SSF_{MSY}$  が 0.949 (95% 信頼区間: 0.763~1.179)、 $F_{2023}/F_{MSY}$  が 1.052 (95% 信頼区間: 0.837~1.287)と推定されたことから、MSYを管理基準とした場合、2023年時点の資源状態は過剰漁獲・乱獲状態であると評価された。※SSF(spawning stock fecundity)は親魚量に代わる指標で、親魚から算出される子の数として計算される。

## 利用・用途

肉はソテーやみそ漬、練り物原料として、鰭はフカヒレ、脊椎骨は医薬・食品原料、皮は革製品として利用される。肉質が良いため、サメ類の中でも商品価値が高い。

## 漁業の概要

メキシコ湾、カリブ海を含む大西洋において、本種を含む外洋性サメ類は、はえ縄、流し網、遊漁を含むその他の漁業(手釣り、底びき網、釣り(遊漁)を含むひき縄、突きん棒等)で混獲されているが、混獲量の大部分はマグロ・カジキ

類を対象としたはえ縄漁業が占めている (ICCAT 2005)。米国、カナダ、英国やアイルランドでは遊漁の対象ともなっている (ICCAT 2005)。

大西洋における我が国のはえ縄漁業は、1957年頃より、キハダ、ビンナガ等の缶詰材料魚種を主対象とする基地操業形態のはえ縄船団によって開始されたが、その後刺身材料としてのメバチ、タイセイヨウクロマグロを対象とした本土操業形態に転向した (久米 1976)。現在では、北米沖 (ニューヨークからカナダのニューファンドランド沖合)

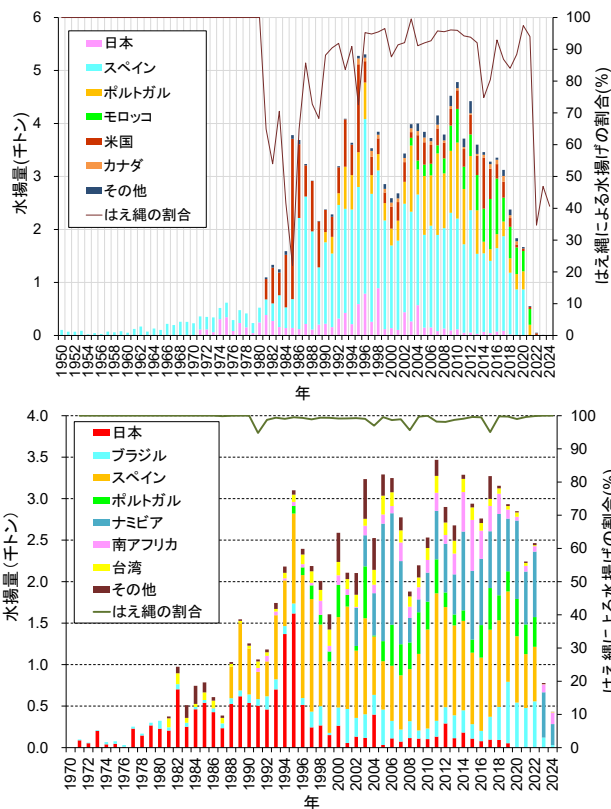


図1. 北大西洋 (上、1950~2024年) 及び南大西洋 (下、1971~2024年) におけるアオザメ水揚量とはえ縄漁業による水揚げが全体を占める割合  
ICCAT 事務局の資料に基づき作成。  
棒グラフは各国・地域による水揚量 (単位：千トン) を、折れ線グラフ (単位：%) ははえ縄漁業による水揚げが全体に占める割合を示す。  
はえ縄以外の漁法はその他の表層漁業が占めている。  
2024年の数値は暫定値。

及びアイスランドやフェロー諸島付近にてタイセイヨウクロマグロを、熱帯域（特に西アフリカ沖）にてメバチやキハダを主対象とした操業を展開している。一連のまぐろはえ縄操業において、アオザメは主に混獲物として利用されてきた。

ICCAT 事務局が公表している漁獲統計資料によれば、北大西洋におけるアオザメの水揚量（報告された漁獲量）は、1980年以前は1,000トン以下であったが、その後1985年にかけて約3,800トンまで急増したのち1989年に約2,200トンまで減少した。その後、1990年代中盤にかけて約5,300トンまで増加した。その後2010年まではおよそ2,600～4,800トンの範囲で推移していたが、2010年以降は減少傾向にあり、2024年の水揚量は9トン（暫定値）となっている。この減少が2017年の管理勧告によるものか資源の減少によるものかは今後検討される予定であるが、2019年以降、投棄量の報告が大きく増加しており、2023年には投棄量が1,084トンに達している（2024年は936トン）。漁業によるインパクトや資源の動向を把握する上でも、各漁業国・地域には死亡投棄・生存放流に関する情報の継続した提供が求められている。漁法別にみると、統計資料が整備され始めた1950～1980年までは水揚量の100%がはえ縄漁業によるとされていたが、1980年代前半は、はえ縄漁業以外の表層漁業による水揚量が増加し同程度となった。1986年頃から再びはえ縄による水揚量が増え始め、1990年中盤以降はおおむね90%以上がはえ縄による水揚げとなっていたが、2022年以降ははえ縄による水揚量は40%前後を推移している（図1上）。国・地域別では、1980年以前の水揚量はスペイン・日本によるものであったが、1981年から米国の水揚量が、1990年からはポルトガルの水揚量が増え始め、2000年代中盤まではスペイン・米国・ポルトガルの水揚量が北大西洋全体の約90%を占めるに至った（図1上）。2000年代中盤からはモロッコの水揚量が増加し、2015～2016年には全体の約30%を占め、2017年には約14%に減少したが、2021年には北大西洋全体の約54%にまで増加した。モロッコの水揚量は、2017～2021年にはおよそ300～600トンの間を推移したが、2022年以降は0トンとなっている。

南大西洋におけるアオザメの水揚量（報告値）は、1970～1980年代中盤までは1,000トン以下の範囲で緩やかに増加し、その後は増減を繰り返しながら1995年には約3,000トンまで急激に増加した。それ以降は増減を繰り返しながらおよそ1,600～3,500トンの範囲で推移していたが、2018年以降は減少傾向を示し、2022年には2,464トンが水揚げされたが、以降急激に減少し、2024年の報告値は431トン（暫定値）となっている。漁法別には、大部分の水揚量（94%以上）がはえ縄によるもので、国・地域別には1970～1980年代終盤までの期間は、日本の水揚量が南大西洋全体の水揚量の大部分を占めたが、その後はスペインの水揚量が増え始め、1988～2022年の期間は、同国の水揚量は南大西洋全体の水揚量の約40%（1988～2022年のスペインの水揚量の水揚年別割合の平均）を占めている。ナミビアは2002年から水揚量が増え始め、2005～2007年には南大西洋全体の水揚量の約40%を占めたが、その後大きく減少し、近年は

30%前後を推移していた。2023年以降、同国の水揚量は、スペインやポルトガル、ブラジル等の水揚量が大きく減少したことから、南大西洋全体の水揚量の60～70%を占めている（図1下）。日本の水揚量は、1980年代終盤から1995年頃までは南大西洋全体の40～60%を占めていたが、それ以後急激に減少し、2016年以降は100トンを下回り、2021年以降の水揚量は0トンとなっている。北大西洋同様、2019年頃から投棄量が増え始め、2024年には南大西洋全体で305トンが放流・投棄されている。

日本のはえ縄の漁獲成績報告書の報告率で選別したデータに基づく分析から、大西洋全域において、1994～2010年の期間に3,340～11,120個体（平均5,730個体）、150～500トン（平均260トン）のアオザメが日本のはえ縄漁船によって漁獲されたと推定されている（Semba and Yokawa 2013）が、規制の影響により、近年はほぼすべての個体を放流している。

## 生物学的特性

マグロ類の地域漁業管理機関（Tuna-RFMO）では、本種の系群は南太平洋・北太平洋・インド洋・南大西洋・北大西洋の5つからなるという仮定のもと、資源評価が行われている。しかし、生物学的特性値の多くは系群毎に明らかにされていないため、一部は大西洋以外の系群の断片的な情報を統合したものを示す。

### 【分布】

本種は全世界の熱帯及び温帯の沿岸から外洋まで広く分布するが、水温16℃以下の環境での出現はまれである（Compagno 2001）（図2）。鉛直方向には、表層から水深500mまでの深度帯に分布することが知られている。系群構造については、ミトコンドリアDNAを用いた解析が行われ、北大西洋の系群は、その他の海域（南大西洋、北太平洋、南太平洋）の系群とは異なる遺伝組成であることが示されており（Heist *et al.* 1996）、ミトゲノムを分析した最新の研究においても、大西洋内に遺伝的に大きく異なる2つの系統の存在が認められた（Takeshima *et al.* 2021, Bernard *et al.* 2025）。また、核ゲノムのデータを分析した Bernard *et*

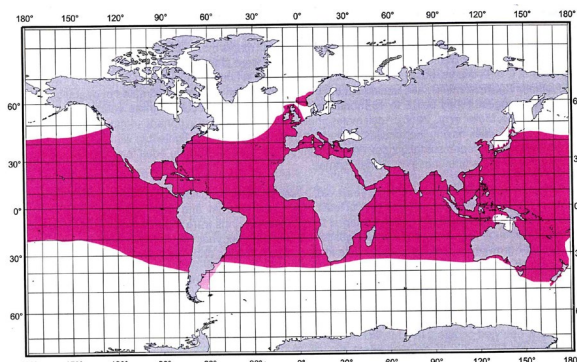


図2. アオザメの分布（Compagno 2001）

色の濃い部分は信用できる情報に基づく既存の分布あるいは確かに分布していると思われるエリア、薄い部分は分布が推定されるもしくは不確実な情報に基づく分布エリアを示す。

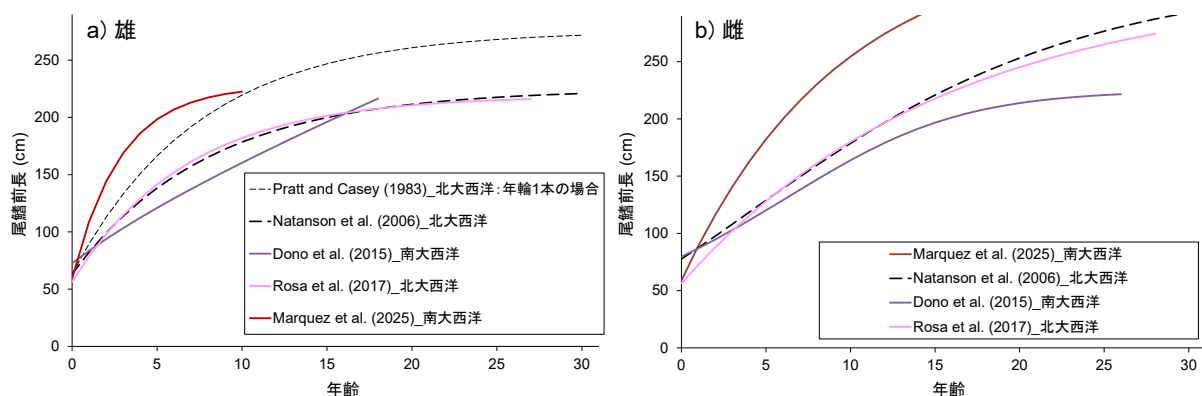


図 3. 大西洋で報告されているアオザメの成長曲線。

Márquez et al.(2025)は、2025 年に南大西洋系群の資源評価で採用された成長曲線。

al.(2025)は、大西洋内のアオザメは遺伝的に交流がある可能性を示唆している。より広範囲にわたる試料を分析した研究では、北大西洋、北インド洋、南半球の個体群は遺伝的に異なる集団である可能性が高いものの、インド洋南東部と太平洋南西部といった南半球内の個体群間には遺伝的交流があることが推定されている (Corrigan *et al.* 2018)。その後発表されたミトコンドリア DNA を用いた全球規模の解析では、地中海の集団は、南アフリカ近海やインド洋、太平洋のアオザメとは遺伝的に異なるとする結果 (Vella and Vella 2023) がある一方、半球間、各地域間において高い遺伝的な連続性が見られるものの、浅い遺伝的分化の兆候が見られるとする結果 (González *et al.* 2023) がある。いずれも、ミトコンドリア DNA の部分的な情報に基づく推定であることから、精度の高い系群構造を推定するためには、核ゲノムに基づく一塩基多型分析等、より解像度の高い遺伝マーカーを用いた解析が必要である。分布域全体をカバーしたより詳細な系群構造については現在研究が行われているところである。

太平洋の知見では、本種は成長段階や性による棲み分けが示唆されているが (中野 1996, Mucientes *et al.* 2009, Semba 2018)、大西洋では包括的な研究が少なく、詳細な分布様式は不明であった。近年の報告によれば、メキシコ湾やポルトガル沖合が産産場・生育場と推定されているが、北西海域が主要な生育場であると考えられている (Natanson *et al.* 2020)。依然として成熟した雌の報告例は少ないこともあり、詳細な分布様式の把握のためには引き続き調査における知見の収集が必要である。

#### 【産卵・回遊】

本種の繁殖様式は卵食型の非胎盤型胎生であり (Wourms 1977)、1 回の産仔数は 4~16、出生時の全長は約 70 cm (Stevens 1983, Mollet *et al.* 2000) である。本種の繁殖サイクルは、妊娠期間ののちに休止期間を伴うと推定されているが、妊娠期間については研究によって推定値の幅が 15~25 か月と大きく、休止期間の推定値は得られていないため、繁殖周期は 2 年もしくは 3 年と考えられている (Mollet *et al.* 2000, Joung and Hsu 2005, Semba *et al.* 2011)。北

大西洋で行われた標識放流調査の結果によると、本種の適水温は 17~22℃ (Casey and Kohler 1992) であること、電子標識を用いた調査では、22~27℃の水温帯に多くの時間滞在していることが明らかとなり (Vaudo *et al.* 2016)、適水温に従って環境水温の変化に伴い季節回遊を行うことが示唆されている。近年は、北大西洋を中心に PSAT (pop-up satellite archival tag: ポップアップアーカイバルタグ) を用いた移動・回遊の研究が盛んに行われており (Loefer *et al.* 2005, Vaudo *et al.* 2016, Vaudo *et al.* 2017)、Vaudo *et al.* (2017) が行った研究では、米国メリーランド沖とメキシコのユカタン半島沖から計 26 個体のアオザメに PSAT を装着・放流した結果、2つの海域で放流された個体の移動は重複することなく、前者は大陸棚を越えて外洋域まで長距離の移動を行ったのに対し、後者は大陸棚に留まり、周年カンペチェバンク周辺に分布していたことから、主要分布域は大陸棚上であるが、移動パターンの個体差が大きいこと、一部の個体は季節回遊を行うことが報告されている。大西洋全域で行われた同様の調査では、北西域・中央部で放流された個体は放流場所から移動する傾向を示す一方、北東域・南西域で放流された個体は長期間、カナリア諸島・アフリカ北西部・ブラジル南部やウルグアイの大陸棚や外洋域に滞在する傾向を示した (Santos *et al.* 2021)。また、ギニア沖で放流された 1 個体は赤道を越えナミビアの排他的経済水域 (EEZ) まで移動したことが確認されており、今後、ゲノム情報に基づく研究とあわせて解析が望まれる。北太平洋においては、幼魚は亜寒帯境界付近を生育場にするると推測されているが (中野 1996)、大西洋においては、ブラジル南部 (Costa *et al.* 2002, Vooren *et al.* 2005) ・アフリカ北西部・ポルトガル近海において幼魚や当歳魚、妊娠個体の出現が報告されており、生育場と推定されている (Maia *et al.* 2007, Natanson *et al.* 2020)。成長段階を通じた性別の移動の詳細は不明であるが、近年成魚の移動に関する知見も報告されており、メキシコ湾西部で成魚を対象に行われた標識放流調査では、放流個体の多くは未成魚と異なりメキシコ湾北西部に留まる傾向を示し、成魚雄はテキサス沖からカリブ海・米国北東部沿岸に季節的に移動したのに対し、成魚雌は大陸棚付近を中心に 2 年以上留まる傾向を示した

(Gibson *et al.* 2021)。

交尾期、交尾場、出産場等についての知見は乏しいが、メキシコ湾は交尾場・出産場の1つと考えられており(Gibson *et al.* 2021)、出産期は晩冬から盛夏にかけてと推測されている(Compagno 2001)。

【成長・成熟】

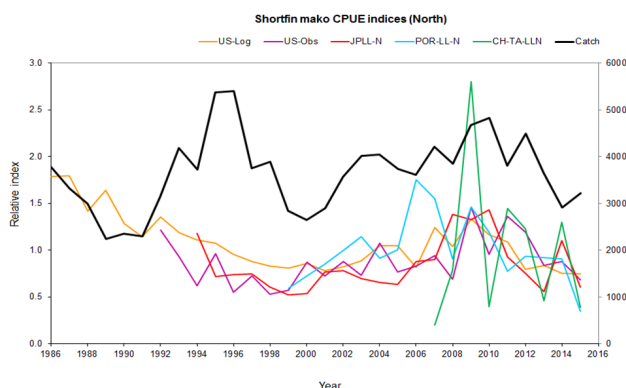
脊椎骨に形成される輪紋から年齢が推定されており、北大西洋の個体群については、Pratt and Casey (1983)、Natanson *et al.* (2006)、Rosa *et al.* (2017)、南大西洋の個体群については、Doño *et al.* (2015)、Márquez *et al.* (2025) から成長式が報告されている。図3はこれまでに報告されている成長式の比較を行ったものである。研究により推定結果に違いが見られるが、これには高齢個体の標本の不足や技術的な問題(年齢査定法・モデル式等)に加えて輪紋周期性の仮定の差(年に2本か1本か)が関与していると考えられる。

50%性成熟体長に関して、北大西洋の個体群では、雄は163~167 cm (Natanson *et al.* 2006, 2020, Maia *et al.* 2007)、雌は190~263 cm (Mollet *et al.* 2000, Natanson *et al.* 2006, 2020, Maia *et al.* 2007)、南大西洋の雄は149~163 cm (Canani and Oddone 2020, Cabanillas-Torpoco *et al.* 2025)、雌は231 cm (Cabanillas-Torpoco *et al.* 2025)、南半球の雌については、224 cm (Mollet *et al.* 2000) と推定されており(いずれも尾叉長または全長の推定値を尾鰭前長に換算した値)、年齢では雄は約8歳、雌は18歳もしくは19歳以上(北大西洋; Natanson *et al.* 2006, 2020) と推定されている。寿命については定義や推定方法によって推定値が異なるが、雄は20~30歳、雌は30~40歳と推定されている(北大西洋; Natanson *et al.* 2006)。

大西洋においては、本種の最大体長・体重は全長445 cm (推定)、553.84 kg と報告されている。

【生産力(内的自然増加率)】

主に南北大西洋系群について報告されている複数の成長



式、成熟や再生産(成熟体長、産仔数、繁殖周期等)、自然死亡率等の情報を基に生産力( $r_{max}$ :資源の最大生産力)及び親子関係のパラメータ( $h$ :スティーブネス)値が推定されている(Cortés 2017, ICCAT 2025a)。その結果、北大西洋系群については、 $r_{max} = 0.031 \sim 0.06$  (/year)、 $h = 0.34 \sim 0.52$  (Cortés 2017)、南大西洋系群については、 $r_{max} = 0.049 \sim 0.114$  (/year)、 $h = 0.39 \sim 0.46$  となり、南大西洋系群の方が、生産力が高いことが示された。南北の違いは、生物パラメータ等の違いが反映されている。生産力に関するパラメータは資源評価結果に大きな影響を及ぼすことから、今後生物パラメータの推定精度向上が望まれる。

【食性・捕食者】

主としてマグロ・カツオ類を含む魚類やイカ類を捕食する(Strasburg 1958、川崎ほか 1962、谷内 1984、Preti *et al.* 2012)。DNAを用いた分析によって、マイルカの捕食も確認されている(Porsmoguer *et al.* 2015)。海域、成長段階等によって異なった物を摂餌しており、特に選択的ではなく、生息域に豊富に分布している利用しやすい餌生物を食べる日和見的捕食者と考えられている。成魚に対する捕食者は知られていないが、幼魚はホホジロザメによる捕食が報告されている(Compagno 2001)。

資源状態

大西洋の南北両系群について、2025年6月にICCATのさめ類作業部会において資源評価が行われたが、北大西洋系群については、生産力に関わるパラメータ推定上の問題により、時間内に信頼性の高い資源状態を推定することができなかったため、以下の北大西洋系群の資源評価結果に関する内容は2017年の資源評価結果となる。北大西洋系群については、日本、米国、台湾、ポルトガルのまぐろはえ縄の漁獲量及び標準化した単位努力量当たりの漁獲量(CPUE)が資源評価の入力データとして用いられた(ICCAT 2017)。各国・地域が提出した(平均値で基準化した)CPUEは北大西洋系群についてはいずれも1996~2010年頃まで増加傾

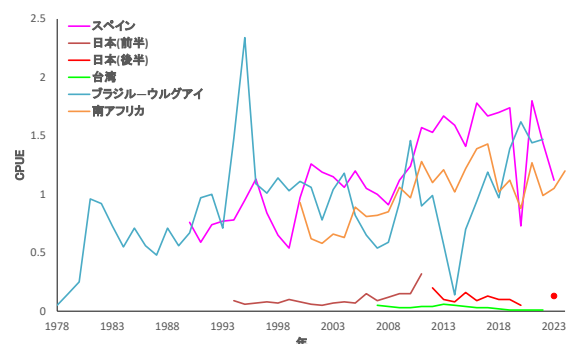


図4. 大西洋におけるアオザメの標準化CPUEと漁獲量の年トレンド(左:北大西洋系群(1986~2015年)、右:南大西洋系群(1978~2024年)) (ICCAT 2017, 2025a)

北大西洋系群の黒線は漁獲量を示す。CPUEを示す線は、北大西洋ではオレンジが米国(ログブック)、紫が米国(オブザーバーデータ)、赤が日本、水色がポルトガル、緑が台湾のはえ縄データを基に相対化した値で、南大西洋ではピンクがスペイン、茶色(前期)と赤(後期)が日本(2021~2022年はコロナ禍のためデータが欠損)、黄緑が台湾、青がブラジル-ウルグアイ、オレンジが南アフリカのはえ縄データを基に計算した値を意味する。

向を示したが、その後2015年まで減少傾向を示した(図4(左))。南大西洋系群については、日本(前半と後半で分割)、スペイン、台湾、ブラジル—ウルグアイ、南アフリカからのまぐろはえ縄の漁獲量に基づくCPUEと2種類の漁獲量(報告値と推定値)が資源評価の入力データとして用いら

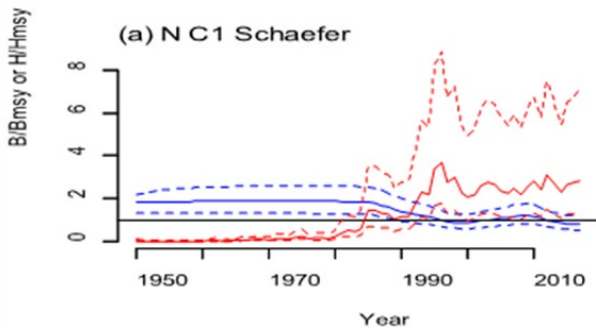


図5. BSP2-JAGSによって推定された北大西洋系群(1950~2015年)の資源量(青線)と漁獲強度(赤線)の年変化。資源量については、各年の資源量とMSY水準の資源量の比を示し、1未満であれば資源量水準が低いことを示す。漁獲強度については、各年の漁獲強度とMSY水準時の漁獲強度の比を示し、1より大きければ漁獲強度が適正水準よりも高いことを示す。ICCAT(2017)より引用。

れた(ICCAT 2025a)。国・地域によって変動はあるものの2023年まで増加もしくは安定した変動傾向を示した(図4(右))。

資源評価モデルは、北大西洋系群についてはベイジアンサープラスプロダクションモデル(Bayesian Surplus Production Model: BSPM)及び統合モデル(SS3)が用いられた。BSPMについてはBSP2-JAGS及びJust Another Bayesian Biomass Assessment(JABBA)が用いられた。JABBAはBSP2-JAGSより機能が充実しており、特徴としてはプロセス誤差や観測誤差に対して柔軟なモデリングが可能であることや自動的に複数の資源量指数データにあてはめることが可能なこと等が挙げられる。北大西洋系群について、BSP2-JAGSの結果では、現在(2015年)の資源量はMSY水準を下回り( $B_{2015}/B_{MSY}=0.66\sim 0.85$ )、漁獲強度はMSY水準を上回る( $H_{2015}/H_{MSY}=2.97\sim 3.58$ )結果となった(図5)。一方、SS3の結果(ベースケース)では、漁獲強度は1980年代中頃からMSY水準を超え、親魚量も1990年代から減少傾向を示しており、現在の資源量はMSY水準付近にあるが、乱獲状態にあり、過剰漁獲状態であることが示唆された(図6)。2つの資源評価モデルの結果を統合して推定した資源状態は、 $B_{2015}/B_{MSY}=0.57\sim 0.95$ 、 $F_{2015}/F_{MSY}=1.93\sim 4.38$ であった。BSP2-JAGSによる将来予測の結果、現在の漁獲量水準を維持した場合、資源量は減少を続けること、減少を食い

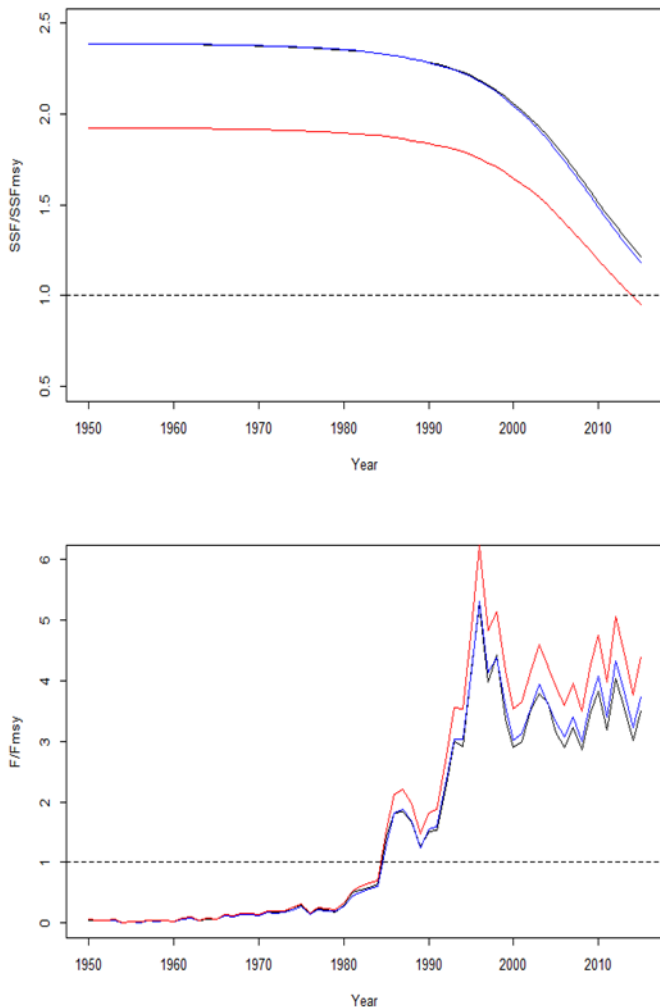


図6. 統合モデルによって推定された北大西洋系群の資源状態(1950~2015年)

上の図は、MSY水準の親魚量に対する各年の親魚量、下の図はMSY水準の漁獲強度に対する各年の漁獲強度(漁獲死亡係数)を示す。線の色は3つの異なる設定についての計算結果を示し、赤線がベースケースの結果を示す。点線は、MSY水準を示す。

止めるには漁獲量を 1,000 トン以下にする必要があることが推定された。BSP2-JAGS から推定された資源量及び SS3 から推定された親魚量や加入量が減少傾向にあることから、北大西洋系群の資源動向は減少傾向にあると推定される。

南大西洋系群について、1971~2023 年までの漁業データに基づき、SS 及び JABBA を用いた資源評価が行われた。2025 年の資源評価では、2 つの生産力(従来値と従来よりも高い値)と 2 つの漁獲量(報告値と推定値)の組み合わせから成る 4 通りのシナリオが検討された。JABBA を用いた解析では、図 4 (右) の全ての CPUE を用いたところ、推定された資源量が、開発前と同じレベルになること、資源が崩壊するレベルになること等、非現実的な値となった。この結果は、入力データの不確実性、特に CPUE と漁獲量の年トレンドが矛盾しておりモデルがこれらをうまく説明できないことによるものと考えられた。このことから、管理勧告の検討

には SS の結果が用いられる事が合意された。SS の分析においても、JABBA の解析と同様に、従来の生産力(低い値)に基づく資源状態は非現実的な結果となったため、従来よりも高い生産力と 2 種類の漁獲量のシナリオに基づき解析が行われた。全てのシナリオを統合した結果、親魚量は 1990 年代中頃から減少傾向を示し、漁獲強度は 1990 年頃から増えはじめ、中頃には MSY 水準を超え、変動しながらも 2022 年まで高い漁獲強度が続いたと推定された(図 7)。2023 年時点において、資源量は、 $SSF_{2023}/SSF_{MSY}$  が 0.949 (95% 信頼区間: 0.763~1.179)、 $F_{2023}/F_{MSY}$  が 1.052 (95% 信頼区間: 0.837~1.287)と推定されたことから、MSY を管理基準とした場合、資源状態は過剰漁獲・乱獲状態であると考えられた(図 8)。

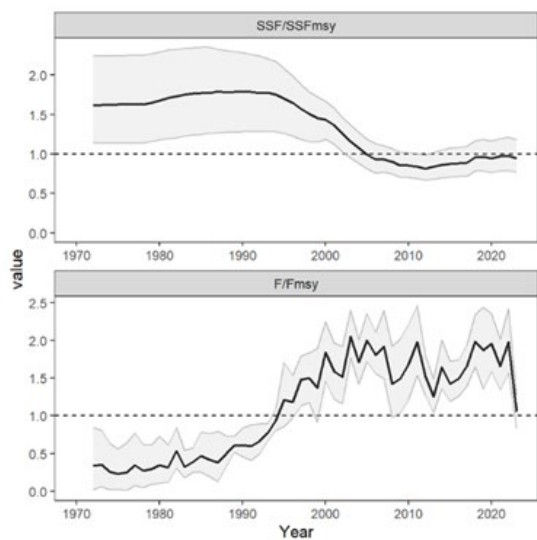


図 7 統合モデルによって推定された南大西洋系群の資源状態 (1971~2023 年)  
上図は MSY 水準の親魚資源量に対する各年の親魚資源量の相対値、下図は MSY 水準の漁獲死亡係数に対する各年の漁獲死亡係数を示す。実線が中央値、灰色の部分は 95%信頼区間を表す。

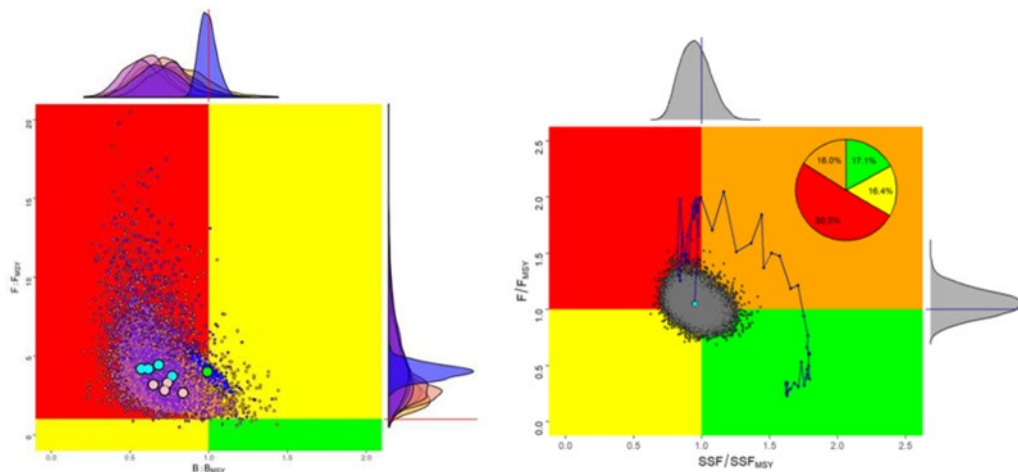


図 8 アオザメ北大西洋系群(左図：2015 年時点)及び南大西洋系群(右図：2023 年時点)の資源状態を示す神戸プロット (ICCAT 2025b)  
横軸は、MSY 水準の資源量に対する各年の資源量の相対値、縦軸は MSY 水準の漁獲死亡係数に対する各年の漁獲死亡係数の相対値を示す。北大西洋系群は、2017 年の資源評価、南大西洋系群は 2025 年の資源評価結果に基づいたもの。南大西洋系群の神戸プロットのうち、黒線は 1971 年から 2023 年に至るまでの資源状態の変化を示し(黒丸が各年の推定値で、水色が 2023 年の推定値)、円グラフは、2023 年の資源状態が 4 つのカラーのエリアに推定される確率を、図の中の点は最終年の資源状態について不確実性を考慮した複数の推定値( $SSF_{2023}/SSF_{MSY}$  と  $F_{2023}/F_{MSY}$ )を、各図の上・右枠上のプロットは、算出された推定値の分布を表している(北大西洋系群の図は、9 つのモデルの結果を 1 つに纏めている)。

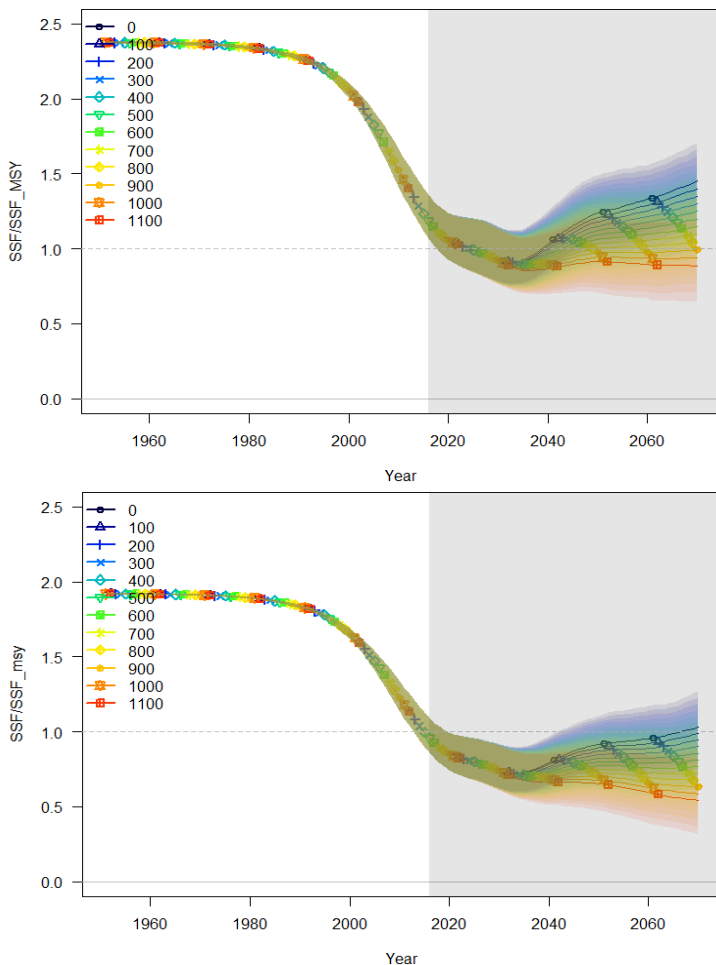


図9. 統合モデル（モデル1：上、モデル3：下）に基づき、TACを100トン刻みで変えた場合の親魚資源量の相対値の変化（将来予測期間：2016～2070年）  
 モデル1は親子関係式がベバートンホルト・自然死亡が雌雄で大きく異なる仮定をおいたモデルで、モデル3は親子関係式がLFSR（Low fecundity stock-recruitment relationship：サメ類のように産仔数が少ない資源に適した関係式）・自然死亡が雌雄で同じ仮定をおいたモデル。実線は中央値、色のついた区間は各漁獲量に対する推定値の95%信頼区間を示す。

これらの結果に基づき、ICCAT科学委員会は、北大西洋系群については、乱獲を止め資源を回復させるには年間漁獲量を500トン以下にすること（2040年までに資源が回復する確率は35%）、目標とする資源回復計画によっては船上保持禁止が最も有効な緊急措置であること（2040年までに資源が回復する確率は54%）、資源の回復を監視するためのデータ収集体制を強化することを勧告した。南大西洋系群については、将来予測の結果を踏まえて、総死亡量（水揚量と死亡投棄の合計）を1,295トンに抑えることで、2050年までに66%の確率で資源は健全な状態に回復すると報告した（ICCAT 2025b）。

北大西洋系群について、前回（2012年）の資源評価結果（南北大西洋系群ともに乱獲状態の可能性は低く、現状の漁獲は持続可能な水準）と大きく異なる評価になった理由としては、①資源評価モデルが変更されたこと（BSPMについてプロセス誤差を考慮したこと）、②各国・地域のCPUEの年トレンドが2010年以降減少傾向を示したこと、③成長式を中心とする生物パラメータが更新され、内的自然増加率が前回の設定の約半分になったこと等が考えられたが、2025年の資源評価では、2017年の資源評価で用いられた生物パラメータを用いた解析では、非現実的な資源状態が推定されたことから、従来よりも速い成長式を採用することとなった。しかし、成長式の不確実性に加えて、管理措置の導入による資源量指数や漁獲量の精度の低下による影響もあり、会期中に信頼性の高い資源状態を推定することがで

きなかつたため、2026年に再度北大西洋系群の資源評価が行われることとなった。

2019年のICCATさめ類作業部会において、統合モデルによる北大西洋系群の将来予測（2016～2070年）を行うとともに、将来予測の中で4つの管理方策（総漁獲可能量（TAC）・漁獲サイズ規制・生存個体の放流・漁獲死亡係数（F）の削減）の効果（各方策あるいは各方策を組み合わせた場合の親魚雌資源の回復状態）を確認し、各規制の効果を議論した（図9）。解析の結果、TAC=0で2050年までにMSY水準まで回復する確率は60%、サイズ規制は回復の速度を速めること、生存放流のレベルに関わらず資源は2035年まで減少すること、漁獲圧が0の場合に資源がMSYを達成するレベルまで回復するには2070年までかかることが予測された。

### 管理方策

全てのTuna-RFMOにおいて、漁獲されたサメ類の完全利用（頭部、内臓及び皮を除く全ての部位を最初の水揚げまたは転載まで船上で保持すること）及び漁獲データ提出が義務付けられている。

また、ICCATの年次会合では、2017年の資源評価の結果を受けて、北大西洋系群について原則所持禁止とするが、オブザーバーが乗船し生存放流・死亡投棄個体数等のデータを収集する条件で死亡個体の保持を認める、あるいは生死に限らず一定サイズ以上の個体については保持を認める等の例外措置を盛り込んだ管理勧告が採択された。

2019年にICCAT科学委員会で行われた、管理勧告に記載された管理方策の効果検証を踏まえて、2019年の年次会合において北大西洋系群の管理勧告の見直しに向けた議論が行われたが合意に至らず、2020年のパネル4会合にて、Webベースの議論が行われた。国・地域によって推奨される管理措置が異なり、合意がなされなかったが、2021年に行われた年次会合において、北大西洋系群に関する管理勧告が策定され、加盟国・地域は2022年に開始される北大西洋系群の資源回復計画を実施することとなった。管理目標は、2070年までに60~70%の確率で資源をMSY水準に回復させることで合意され、①2022~2023年に本系群の船上保持を禁止とすること、②次回の科学委員会による検討が行われるまでは、漁獲による死亡量は250トンを超えないようにすること、③このため2023年以降は毎年、科学委員会が許容保持量を計算すること、等が合意された。その他、ICCATへのデータ提出（水揚げ、死亡投棄、生存放流数）や資源回復のための各種の調査（交尾・出産・生育場の特定、漁場・漁期や混獲回避に関係する管理措置等）の実施が推奨された。

2025年の科学委員会において、2026年の北大西洋系群の許容保持量が検討された。水揚量や投棄量、放流後死亡率等の利用可能な情報に基づき推定した2024年の北大西洋系群の総死亡量（水揚推定量8トン、死亡投棄量935トンを含む）は1,179トンとなり、漁獲許容量の250トンを超過したことから、2026年の許容保持量は0トンとなった。南大西洋系群については、2024年の総死亡量（水揚推定量430トン、死亡投棄量は305トンを含む）は794トンとなり、506トンの死亡個体の保持が許容された（内、日本の割り当ては約18トン：ICCAT 2025b）。また、2025年の年次会合において、科学委員会の資源評価結果に基づき、1,000トンの最大死亡許容量を設定し、このうち死亡投棄・生存放流による推定死亡量である363トンを差し引いた許容保持量637トンを各国に割り当てることで合意した。これにより、2026年の我が国の許容保持量の割り当ては26.32トンとなった。

2019年8月に開催されたCITES第18回締約国会合において、本種及びバケアオザメ（類似種規定による）の附属書IIへの掲載が提案され、投票の結果、採択された。附属書II掲載は2019年11月26日から発効し、本種の魚体、鱭等を含む一切の派生物を貿易する際は、輸出国による輸出許可書の発給が必要となり、公海域で採捕し自国に持ち帰る行為についても証明書の事前発給が義務付けられる（海からの持込み）。我が国は、アオザメは科学的に附属書II掲載基準を満たしておらず（Kai 2021）、FAO専門家パネルにおいても、その旨結論付けられていることから、本種及びバケアオザメの附属書II掲載について留保している。このため、本種を締約国に輸出する場合には輸出許可書が必要となるものの、自国への海からの持込みについての証明書の発給は不要となっている。

## 執筆者

かつお・まぐろユニット

かじき・さめサブユニット

水産資源研究所 水産資源研究センター

広域性資源部 まぐろ第4グループ

仙波 靖子・甲斐 幹彦・高橋 将馬

## 参考文献

- Bernard, A.M., Mehloose, M.R., Finnegan, K.A., Wetherbee, B.M. and Shivji, M.S. 2025. Connections Across Open Water: A Bi-Organellar, Genomics-Scale Assessment of Atlantic-Wide Population Dynamics in a Pelagic, Endangered Apex Predator Shark (*Isurus oxyrinchus*). 2025. *Evol Appl*, 18:e70071. Doi:10.1111/eva.70071
- Cabanillas-Torpoco, M., Márquez, R., Oddone, M.C., and Cardoso, L.G. 2025. Reproductive biology and population structure of the shortfin mako shark (*Isurus oxyrinchus*) in the southwestern Atlantic Ocean. *Environ. Biol. Fish.*108: 639-660. Doi: 10.1007/s10641-024-01613-3
- Canani, G., and Oddone, M.C. 2020. Reproductive biology of *Isurus oxyrinchus* captured by the south Brazilian surface longline commercial fleet in the Southwest Atlantic Ocean, with data on CPUE and size distribution by sex. *J. Northw. Atl. Fish. Sci.*, 51: 105-116.
- Casey, J.G., and Kohler, N.E. 1992. Tagging studies on the shortfin mako shark (*Isurus oxyrinchus*) in the western North Atlantic. *Aust. J. Mar. Freshw. Res.*, 43: 45-60.
- Compagno, L.J.V. 2001. FAO species catalog, Vol.4: Sharks of the world; Part 2 - Bullhead, mackerel and carpet sharks. Food and Agricultural Organization of the United Nations. Rome, Italy. 269 pp.
- Corrigan, S., Lowther, A.D., Beheregaray, L.B., Bruce, B.D., Cliff, G., Duffy, C.A., Foulis, A., Francis, M.P., Goldsworthy, S.D., Hyde, J.R., Jabado, R.W., Kacev, D., Marshall, L., Mucientes, G.R., Naylor, G.J.P., Pepperell, J.G., Queiroz, N., White, W.T., Wintner, S.P., and Rogers, P.J. 2018. Population connectivity of the highly migratory shortfin mako (*Isurus oxyrinchus* Rafinesque 1810) and implications for management in the Southern Hemisphere. *Front. Ecol. Evol.*, 6: 187.
- Cortés, E. 2017. Estimates of maximum population growth rate and steepness for shortfin makos in the north and south Atlantic Ocean.(SCRS/2017/126) *Collect. Vol. Sci. Pap. ICCAT*, 74(4): 1822-1829.
- Costa, F.E.S., Braga, F.M.S., Arfelli, C.A., and Amorim, A.F. 2002. Aspects of the reproductive biology of the Shortfin mako, *Isurus oxyrinchus* (elasmobranchii Lamnidae), in the southeastern region of Brazil. *Braz. J. Biol.*, 62: 239-248. Doi: 10.1590/S1519-69842002000200007.
- Doño, F., Montealegre-Quijano, S., Domingo, A., and Kinas, P.G. 2015. Bayesian age and growth analysis of the shortfin mako shark *Isurus oxyrinchus* in the Western South Atlantic Ocean using a flexible model. *Environ. Biol. Fishes.*, 98: 517-533.
- Gibson, K.J., Streich, M.K., Topping, T.S., and Stunz, G.W. 2021. New insights into the seasonal movement patterns of shortfin mako sharks in the Gulf of Mexico. *Front. Mar. Sci.*, 8:623104. Doi: 10.3389/fmars.2021.623104

- González, M.T., Leiva, N.V., Zárata, P.M. and Baeza, J.A. 2023. Regional (south-eastern Pacific Ocean) population genetics and global phylogeography of two endangered highly migratory pelagic sharks, the blue shark *Prionace glauca* and shortfin mako *Isurus oxyrinchus*. *Aquat. Conserv.: Mar. Freshw. Ecosyst.*, 33(10), 1098–1115. Doi: 10.1002/aqc.3987
- Heist, E.J., Musick, J.A., and Graves, J.E. 1996. Genetic population structure of the shortfin mako (*Isurus oxyrinchus*) inferred from restriction fragment length polymorphism analysis of mitochondrial DNA. *Can. J. Fish Aquat. Sci.*, 53: 583-588.
- ICCAT. 2005. Report of the 2004 Inter-sessional meeting of the ICCAT Sub-Committee on by-catches: shark stock assessment.(SCRS/2005/014) Collect. Vol. Sci. Pap. ICCAT, 58(3): 790-890.  
[https://www.iccat.int/Documents/CVSP/CV058\\_2005/n\\_3/CV058030799.pdf](https://www.iccat.int/Documents/CVSP/CV058_2005/n_3/CV058030799.pdf) (2025年11月10日)
- ICCAT. 2017. Report of the 2017 ICCAT shortfin mako assessment meeting (Madrid, Spain 12-16 June 2017). 64 pp.  
[https://www.iccat.int/Documents/Meetings/Docs/2017\\_SMA\\_ASS\\_REP\\_ENG.pdf](https://www.iccat.int/Documents/Meetings/Docs/2017_SMA_ASS_REP_ENG.pdf) (2025年11月10日)
- ICCAT. 2025a. Report of the 2025 ICCAT shortfin mako assessment meeting (Hybrid/Madrid, Spain 9-13 June 2025). 72 pp.  
[https://www.iccat.int/Documents/Meetings/Docs/2025/Reports/2025\\_SMA\\_SA\\_ENG.pdf](https://www.iccat.int/Documents/Meetings/Docs/2025/Reports/2025_SMA_SA_ENG.pdf) (2025年11月10日)
- ICCAT. 2025b. REPORT OF THE STANDING COMMITTEE ON RESEARCH AND STATISTICS (SCRS) (Hybrid/Madrid, – 29 September – 3 October 2025). 322 pp.  
[https://www.iccat.int/Documents/Meetings/Docs/2025/Reports/2025\\_SCRS\\_ENG.pdf](https://www.iccat.int/Documents/Meetings/Docs/2025/Reports/2025_SCRS_ENG.pdf) (2025年11月10日)
- Joung, S.J., and Hsu, H.H. 2005. Reproduction and Embryonic Development of the Shortfin Mako, *Isurus oxyrinchus* Rafinesque, 1810, in the Northwestern Pacific. *Zool. Stud.*, 44: 487-496.
- Kai, M. 2021. Are the current IUCN category and CITES listing appropriate for the conservation and management of shortfin mako, *Isurus oxyrinchus*, in the North Pacific Ocean? *Mar. Policy*, 134: 104790.
- 川崎 健・八百正和・安楽守哉・永沼 章・浅野政宏. 1962. 東北海区に分布する表層性魚食性魚類群集の構造とその変動機構について. 第1報. 東北区水産研究所研究報告, 22: 1-44.
- 久米 漸. 1976. 2. 大西洋マゴロ類の保存国際委員会の活動. 水産海洋研究 29号, 44-45.
- Loefer, J.K., Sedberry, G.R., and McGovern, J.C. 2005. Vertical movements of a shortfin mako in the western North Atlantic as determined by pop-up satellite tagging. *Southeast. Nat.*, 4: 237-246.
- Maia, A., Queiroz, N.C., Cabral, H.N., dos Santos, A.M., and Correia, J.P.S. 2007. Reproductive biology and population dynamics of the shortfin mako, *Isurus oxyrinchus* Rafinesque, 1810, off the southwest Portuguese coast, eastern North Atlantic. *J. Appl. Ichthyol.*, 23: 246-251.
- Márquez, R., Santos, C., Semba, Y., Rosa, D., Jagger, C., Forselledo, R., Mas, F., Domingo A., Sant'Ana, R., Coelho, R., and Cardoso, L.G. 2025. Preliminary results on the age and growth of the shortfin mako shark (*Isurus oxyrinchus*) in the South Atlantic Ocean. SCRS/2025/040\*. (cited in ICCAT 2025a) (\*直接参照できなかったもの).
- Mollet, H.F., Cliff, G., Pratt, H.L.Jr., and Stevens, J.D. 2000. Reproductive biology of the female shortfin mako, *Isurus oxyrinchus* Rafinesque, 1810, with comments on the embryonic development of lamnoids. *Fish Bull.*, 98: 299-318.
- Mucientes, G.R., Queiroz, N., Sousa, L.L., Tarroso, P., and Sims, D.W. 2009. Sexual segregation of pelagic sharks and the potential threat from fisheries. *Biol. Lett.*, 5: 156-159.
- 中野秀樹. 1996. 北太平洋における外洋性板鰐類の分布. 月刊海洋, 28: 407-415.
- Natanson, L.J., Kohler, N.E., Ardizzone, D., Cailliet, G.M., Wintner, S.P., and Mollet, H.F. 2006. Validated age and growth estimates for the shortfin mako, *Isurus oxyrinchus*, in the North Atlantic Ocean. *Environ. Biol. Fishes.*, 77: 367-383.
- Natanson, L.J., Winton, M., Bowlby, H., Joyce, W., Deacy, B., Coelho, R., and Rosa, D. 2020. Updated reproductive parameters for the shortfin mako (*Isurus oxyrinchus*) in the North Atlantic Ocean with inferences of distribution by sex and reproductive stage. *Fish. Bull.*, 118: 21-36. Doi: 10.7755/FB.118.1.3
- Porsmoguer, S.B., Bănar, D., Boudouresque, C.F., Dekeyser, I., Viricel, A., and Merchán, M. 2015. DNA evidence of the consumption of short-beaked common dolphin *Delphinus delphis* by the shortfin mako shark *Isurus oxyrinchus*. *Mar. Ecol. Prog. Ser.*, 532: 177-183.
- Pratt, H.L.Jr., and Casey, J.G. 1983. Age and growth of the shortfin mako, *Isurus oxyrinchus*, using four methods. *Can. J. Fish. Aquat. Sci.*, 40: 1944-1957.
- Preti, A., Soykan, C.U., Dewar, H., Wells, R.J.D., Spear, N., and Kohin, S. 2012. Comparative feeding ecology of shortfin mako, blue and thresher sharks in the California Current. *Environ. Biol. Fish.*, 95: 127-146.
- Rosa, D., Mas, F., Mathers, A., Natanson, L.J., Domingo, A., Carlson, J., and Coelho, R. 2017. Age and growth of shortfin mako in the north Atlantic, with revised parameters for consideration to use in the stock assessment. SCRS/2017/111. 22 pp.
- Santos, C.C., Domingo, A., Carlson, J., Natanson, L.J., Travassos, P., Macías, D., Cortés, E., Miller, P., Hazin, F., Mas, F., Ortiz de Urbina, J., Lino, P.G., and Coelho, R. 2021. Movements, habitat use, and diving behavior of shortfin mako in the Atlantic Ocean. *Front. Mar. Sci.*, 8: 686343. Doi: 10.3389/fmars.2021.686343.
- Semba, Y. 2018. Significance of sex-specific ecological and life history traits on the sustainable exploitation of sharks. *In*

- Aoki, I., Yamakawa, T., and Takasuka, A. (eds.), Fish population dynamics, monitoring, and management. Chapter 5. 77-104 pp. Doi: 10.1007/978-4-431-56621-2\_5
- Semba, Y., Aoki, I., and Yokawa, K. 2011. Size at maturity and reproductive traits of shortfin mako, *Isurus oxyrinchus*, in the western and central North Pacific. Mar. Freshw. Res., 62: 1-10.
- Semba, Y., and Yokawa, K. 2013. Estimation of catches for shortfin mako (*Isurus oxyrinchus*) by the Japanese tuna longline fishery in the Atlantic Ocean from 1994 to 2010. Collect. Vol. Sci. Pap. ICCAT, 69(4): 1625-1629.
- Stevens, J.D. 1983. Observation on reproduction in the shortfin mako *Isurus oxyrinchus*. Copeia, 1983: 126-130.
- Strasburg, D.W. 1958. Distribution, abundance, and habitats of pelagic sharks in the central Pacific Ocean. Fish. Bull. U.S. Fish. Wildlife Serv., 58: 335-361.
- Takeshima, H., Nanba, R., Ooka S., Ando, D., Hayakawa, A., Kokubun, S., Noda, S., Takano, Y., Yanada, R., Coelho, R., Santos, M.N., Cortés, E., Domingo, A., de Urbina, J.O., Sakuma, K., Nohara, K., and Semba, Y. 2021. Mitogenomics and nuclear-genome-wide single-nucleotide polymorphism genotyping can resolve the complex genetic population structure of shortfin mako (*Isurus oxyrinchus*) in the Atlantic Ocean. SCRS/2021/163. 16 pp.
- 谷内 透. 1984. 漁業との関わり. In 谷内 透・須山三千三 (編), 資源生物としてのサメ・エイ類. 恒星社厚生閣, 東京. 35-45 pp.
- Vaudo, J.J., Bryne, M.E., Wetherbee, B.M., Harvey, G.M., and Shivji, M.S. 2017. Long-term satellite tracking reveals region-specific movements of a large pelagic predator, the shortfin mako shark, in the western North Atlantic Ocean. J. Appl. Ecol., 54: 1765-1775.
- Vaudo, J.J., Wetherbee, B.M., Wood, A.D., Weng, K., Howey-Jordan, L.A., Harvey, G.M., and Shivji, M.S. 2016. Vertical movements of shortfin mako sharks *Isurus oxyrinchus* in the western North Atlantic Ocean are strongly influenced by temperature. Mar. Ecol. Prog. Ser., 547: 163-175.
- Vella N., Vella A. 2023. Phylogeographic Analyses of the Shortfin Mako, *Isurus oxyrinchus* Rafinesque, 1810 (Chondrichthyes: Lamniformes) from the Central Mediterranean Sea, a Critically Endangered Species in the Region. Fishes, 8: 520. Doi: 10.3390/fishes8100520
- Vooren, C.M., Klippel, S., and Galina, A.B. 2005. Os Elasmobrânquios das águas costeiras da Plataforma Sul. In Vooren, C.M., and Klippel, S. (eds.) Ações Para a Conservação de Tubarões e Raias no Sul do Brasil, (Porto Alegre: Igaré), 113-120 pp.
- Wourms, J.P. 1977. Reproduction and development in chondrichthyan fishes. Amer. Zool., 17: 379-410.

アオザメ（大西洋）の資源の現況（要約表）

海域	北大西洋	南大西洋
世界の漁獲量 (最近5年間)	9~1,667トン(水揚量) 最近(2024)年:9トン 平均:459トン(2020~2024年)	431~2,849トン(水揚量) 最近(2024)年:431トン 平均:1,753トン (2020~2024年)
我が国の漁獲量 (最近5年間)	0トン(水揚量) 最近(2024)年:0トン 平均:0トン(2020~2024年)	0~1トン(水揚量) 最近(2024)年:0トン 平均:0.2トン(2020~2024年)
資源評価の方法	ベイジアンサープラス プロダクションモデル (BSPM(BSP2-JAGS、JABBA)) 及び統合モデル(SS)による解析	SSによる解析
資源の状態 (資源評価結果)	$B_{2015}/B_{MSY}$ :0.57~0.95 $F_{2015}/F_{MSY}$ :1.93~4.38 2015年の資源状態は、 過剰漁獲であり乱獲状態である	$SSF_{2023}/SSF_{MSY}$ :0.949 (95%信頼区間:0.763~1.179) $F_{2023}/F_{MSY}$ :1.052 (95%信頼区間:0.837~1.287) 2023年の資源状態は、 過剰漁獲であり乱獲状態の可能性がある
管理目標	MSY	MSY
管理措置	漁獲物の完全利用等 原則所持禁止(2022~2023年) 毎年の漁獲許容量を上限250トンとし、 死亡投棄量がこれを超えた場合、 許容保持量(死亡個体のみ)はゼロ (2024年以降、次回の検討まで)	漁獲物の完全利用等 毎年の漁獲許容量を上限1,295トンとし、 死亡投棄量がこれを超えた場合、 許容保持量(死亡個体のみ)はゼロ
管理機関・関係機関	FAO、ICCAT、CITES	FAO、ICCAT、CITES、CCSBT
最近の資源評価年	2019年(統合モデルアップデート)	2025年
次回の資源評価年	2026年	未定

2024年の値は暫定値。